『ひかりの花束』三木裕子

令和3年5月　青磁社刊

『ひかりの花束』は、私の第一歌集です。出したい、出さなければ……どうしようかと迷っていた時に背中を押して下さったのは鈴木竹志さんでした。「もう出さないと後悔するよ」。思い切って敬愛する高野公彦氏にお願いしたところ嬉しいお返事を頂き、それだけで幸せでした。夢のようでした。

歌集を出すことは、いろいろな人の力をお借りして自分の人生を整理することのように思えます。楽しい楽しい、そして、少し苦しい行程を経て歌集を手にした時は、満足と感謝の気持ちでいっぱいでした。今は次のステップ。自分と正直に向き合って出来ることをしよう、困った時は無理せず人を頼ろう、利他の心をなんて思っています。

歌集を出そうか迷っている方、どうぞ勇気を出してエイッと踏み出して下さい。知らなかった自分に出会えて生き方が変わると自信を持って言えます。

歌集を出して道しるべが見つかりました。

――歌集の著者から――

『ドルフィンキック』斉藤淳子

令和3年6月　柊書房刊

歌集を出版したことで多くの人たちと出会い直すことができた。歌仲間からはあたたかい批評や励ましを、恩師や旧友からは「懐かしい」「共感した」といった言葉をいただいた。そのすべてが嬉しく、ありがたいと感謝している。

その中でここに留めておこうと思うのは、昨年十二月に他界された古屋祥子さんの言葉だ。便箋三枚に毛筆で作品を抄出してくださり、別に丁寧なお手紙が添えられていた。「私の生涯とは全く別の世界があるということを知りました。人それぞれの世界をその人らしく表現すること、短歌はそれにふさわしい詩型であることを改めて学ばせて頂きました」とあり、ご自身もまだまだ続けたいと書かれてあった。四月号の追悼記事で初めて古屋さんがどんな方だったかを知り、お顔を拝見して感銘を新たにした。さらにお手紙には「コスモスのために、またご自分のためにますますお励みください」とあり、この言葉が以来ずっと私の心の奥に刻まれている。

『鳩寿燦々』北条忠政

令和3年6月　柊書房刊

二度あることは三度あるという。私はかつてタクシーの事故に二度遭った。二度とも目を閉じていて最初は追突、次は追突された。以来、タクシーに乗れば緊張して専ら前方を見ている。

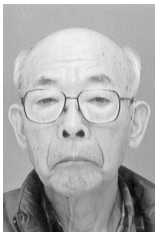
いいことも二度経験した。短歌のＮＨＫ全国大会の特選を頂き、「紅白」と同じ舞台で晴れがましい表彰を受けた。何とか三度目をと狙うのだが、そうはいかない。でも夢は捨てていない。

ところで、私は歌集を二回上梓した。その第一歌集のあとがきに「私は白寿まで生きたいと願っているので、歌集も第二、第三の可能性がある、その実現に向けて精進すべく、あえて『第一歌集』の名に執着した」と書いた。そしてその八年後に第二歌集の上梓を果たした。

さて、現在九一歳、図らずも既に二度手術した癌の三度目が芽を吹き出した。その身に白寿への坂は一段と厳しそうだ。一方「三度目の正直」ともいう。今までより少しはましな歌集をと願う。但し寿命との勝負だ。

――歌集の著者から――

『戦あらすな』島田　暉



令和3年6月　角川書店刊

令和三年六月に歌集『戦あらすな』を出版してから、もう二年が過ぎようとしている。歌集の末尾にコロナ禍のことが詠まれているので、コロナの奴もなかなかしつこいですね。コロナの被害の影響で外出は極度に制限されています。仲間の集まりはもちろん、映画館や絵画の展覧会などは一切出かけてゆけず、ただただ家にこもるだけです。おかげで雨が降らなければ近所の公園や川の土手や田畑の畦路などを一日七千歩ぐらいとろとろ歩いています。近所の米軍基地の跡地では五年後に世界の万国花博覧会が開かれるので近くの公園では樹木や草花がよく手入れされています。ことに草花の植えかえや引っ越しなど盛んに続けられています。特にチューリップの花が見事に咲いて私の目を楽しませてくれました。

たまには田畑や野原に寝転んで青く拡がる大空や広い野原の草木の呼吸をのんびりと長く耳に聞くのも人生の楽しみでした。おとろえた老いし身を伸びのびとのばして自然の大地の呼吸に同化するのも本当に楽しい。

『農婦の証』青野多都留

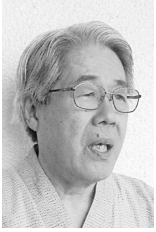
令和3年6月　柊書房刊

私は営農指導員の夫の栽培技術の普及の試作品の野菜作りに過し、子育ても終り共に過した甥達も生長し義母も他界して少し時間が取れる様になり、二〇〇〇年を機に「何か私にも」と思う様になった頃、近くの酪農家で短歌をしていた山岸登民雄さんにお話ししたところ、直ちに旭川支部長の松田一夫師に紹介を頂きました。歌会に入って間もなく、松田師より東神楽で初案され発祥の地となるグリーンアスパラの事が話題になり、グリーンアスパラ栽培が五十余年を過ぎ皆様の喜ぶこの様な野菜になるとは思いもしてませんでしたので、誠に嬉しく思ってます。歌集『農婦の証』にも一部書いていますが、歌という優しく厳しき充足を得て私の人生が大きく躍動し前に進んでいます。コスモス内外の方々の励ましの御手紙を頂き、先輩や仲間からの貴重な批評や感想など嬉しく大切にします。以前より楽しく自由に歌が詠める様になったと思います。ありがとうございました。

――歌集の著者から――

『水の自画像』高野公彦

令和3年7月　短歌研究社刊



かつてコスモス会員だった浜松市の西野文子さんは、書道の道に進み、去年開かれた書道展で私の歌「断崖を大落下する一瀑布その純白は水の自画像」を揮毫して出品したという。あとでその作品を写真に撮って送ってくれた。優雅で力のある筆使いの文字だった。〈人が、筆で、私の歌を書いてくれるなんて〉と私は嬉しかった。

さて、それとは別の話だが、歌集の中ほどに伊能忠敬を詠んだ連作「なんばあるき」十首がある。忠敬は50歳で家業を人に譲って隠居し、それから天文学などを学んだあと、十七年にわたって日本全土の沿岸を歩き、精密な日本地図を作製した。歩いた距離は計四万キロ、つまり地球を一周したのと同じである。

今でいえば、退職後の高齢者が一念発起して勉強し、そのあと前人未到の仕事を成し遂げた――これが忠敬の偉大さである。私は今回わずか十首の歌しか作らなかったのが残念だが、今後も忠敬のことを時折思いつつ八十代を生きて行きたい。

『雪麻呂』小島ゆかり

令和3年7月　短歌研究社刊

十五冊目の歌集です。三十歳で第一歌集を出してから三十数年の時が流れて、あらためて歌を作ることの怖れと喜びを実感します。また、コロナ禍によりこれまで以上に、歌と歌の仲間の大切さが身に沁みました。

毎日なにかしら人の歌の批評や鑑賞をしているのに、自分の歌となると、どこか視覚がさえぎられるような不安がつきまといます。そして年々、創作の謎は深まるばかりです。本歌集も、ささやかな日常の周辺の作品世界ですが、本当に思いがけず、大岡信賞をいただき幸福なことでした。詩や小説や音楽や美術や、他ジャンルの選考委員のみなさんが評価してくださったことが、新しい希望になりました。

ところで、「雪麻呂」ってだれだったんだろうと、いまさらながら不思議な気持ちになります。長く歌を作り続けていると、たまにこんな説明しがたいなにか、知っているような知らないような記憶や風景と出会うときがあって、ひととき心が自由になります。

――歌集の著者から――

『楕円軌道』松尾祥子

令和3年7月　角川書店刊

第四歌集の『月と海』は夫が病を得て、快復を間近に突然亡くなるという思いもよらない三年間を纏めた歌集で、この間に父も見送った。夫の命を言祝ぎたい一心で夫の誕生日に出版したが、その後は、歌集を出すことなど考えもしなかった。変わってしまった生活に心身ともに不調を兆し、当時の記憶も朧だが、歌だけは詠んでいたので、歌を読み返すとそれでも沢山の人に助けられて何とか生きてきた日々が蘇る。

歌集を出したいと突如思い立ったのは、それから六年経った春のこと。母が九十二歳を過ぎ、「最晩年だから」と言うのを聞いて、母の挽歌が載っていない歌集を出さねばと思ったのだ。ちょうど長女が二人目を妊娠し、秋が出産予定と聞いて、とにかくそれまでに出そうと決意した。思い返せば、第四歌集を除いて、いつも六年ごとに歌集を出して来た。それが私のペースなのかも知れない。第五歌集『楕円軌道』は娘二人の結婚、出産があり、家族が増える歌集となって、ほっとしている。